

# 清掃清潔と人間性

現代はトイレ掃除が人間修業のひとつにあげられるほど清掃の価値が高くなった。掃除道を唱える人も出てきている。第四の清潔は前の三つと異質である。五番目のしつけはもっと異質である。工場やサービス業で従業員に環境改善の手法として求めるなら3Sでよかったのではないか。

## 掃除でわかる人間性の九段階

人は百万年前の石器時代から整理整頓を行っていた。食べた後の骨や貝殻、壊れて使えなくなったものはごみ捨て場に捨てた。使った道具は所定の場所に戻した。家族の長が食物をそれぞれに配と、分類して置いた。

掃除（以下掃除という）は家の発達とともに頻度重要度が増してきた。穴居や竪穴住居の原始時代は住空間が狭く、掃除の必要がなかった。生活は整理整頓だけで十分だった。

一室だけの土間住居から木の床の家になり、部屋が柱で区切られ廊下ができ量が敷かれるようになって掃除つまり掃く、拭く、磨くが必要になった。平安時代（西暦七九四）には文書に箒（ほうき）が登場し、室町時代（西暦一三三六）には町に箒売りが登場している。東日本では竹棒の先にホウキモロコシを平たく編んで揃えた座敷箒を売り歩く行商人が現在もいる。

人が動き人が生活すれば家も道路も什器も汚れる。放っておけば汚れが積み重なり広がって人が住めない家、人が使えない什器、人が歩けない道路になってしまう。人里離れた山間部ではいらぬが、都会では掃除は人の生活の一部にまでなっている。

昔から掃除は職業になっていくが、時代が変わり現在は一般人も掃除と無関係ではいられなくなった。家庭では主婦だけでなく夫も、会社では新人や女子に限らず上司や社長といえど掃除に気を遣い、労力を提供しなくてはならない社会情勢になった。

つまり掃除をいやがる人は共同体の同志と見做されず、「意識の低い人」と見下されるようになった。逆に掃除を真剣にする人は立派な人、偉い人という価値観が確立されたのである。

掃除を見れば人間がわかる。道路や公衆便所や公共施設など利害と関係ない所を黙々と掃除する。上司から「汚れているからこをきれいにしてください」と指示されると「私の仕事ではありません」と断る人は下の下の九番。

経宮官理講座 303 染谷和巳

人ができる清潔は限られていて。石けんを使った手洗い、洗濯されたユニフォーム、髪の毛が落ちない帽子着用、靴底洗浄、滅菌ルームの通過……とこの程度。あとは機械や薬品に頼るしかない。つまり整理する、整頓する、清掃する人が主体となって行うことだが、清潔するという動詞はなく、清潔は人が行動することによって手に入れられるものではない。自然界では不要の概念である。大自然の中では空気中の塵も臭いも微菌までもあるがままにあるのであり、何の害もない。不潔は人が作り出したもの。工場ではその不潔をなくす必要があるので清潔を5Sの一本の柱にしたのである。

5Sはもともと工場環境改善活動のスローガンである。この活動により職場がきれいになり働く人の意欲が向上する。それにより仕事の能率が上がり不良品率が下がり安全面にも寄与する。人間性の向上を目指したのではない。特に四番目の清潔は人間性との関係が薄い。極言すれば清潔志向や清潔維持の努力は人間性を損う一面がある。

日本人は世界一清潔好きである。毎日風呂に入り毎日顔を洗い（これだけで白人は啞然とする。パリのマドモアゼルは風呂も頭シヤンプーも週に一、二度が普通だという）、毎朝歯を磨き顔を洗っている。朝から晩まで一日何回も……その真剣な行動が目障りで私は仕事に身が入らなかつた。

清潔は機械と薬品に任せよう。状態をいう。整理整頓清掃では空気中の塵や臭い（臭いも微細な物質だが）、微菌は除けない。集塵機、空気清浄機、消臭脱臭の器具や薬品、殺菌灯や滅菌滅菌剤といった「武器弾薬」を使わざるを得ない。必要以外の無菌培養は有害だ。潔癖症の人はまわりの人にも潔癖を求める。そこまでしなくても仕事や生活に支障はないのに。タバコの煙がくると手を振って「ヤメテクダサイ」と叫び、殺人犯を見るような憎しみのこもった目付きになるおばさん、あなたの心はカサカサに乾いている。工場内は無菌でも外へ出れば微菌がうようよ。人は生まれてからずっと微菌を吸ったり吐いたりして生きてきた。"純水"ではない水を飲んで生きてきた。無菌は工場や病院以外ではないものではない。赤ん坊を無菌培養すれば環境に適応できず病気になる。5Sが人間の基本であり、整理整頓清掃は豊かな人間性を作る。この三つの「目標」といふべきビュアすなわち清潔の追及が人間性に欠ける人間を作るとは皮肉なことである。

### 必要以外の無菌培養は有害だ